

Title	東北地方における晩期縄文式土器の器形組成
Sub Title	An examination of type frequencies in the latest Jomon pottery in the North Eastern Japan
Author	藤村, 東男(Fujimura, Haruo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1980
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.50, No.記念号 (1980. 11) ,p.645- 654
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	考古民族・地理 第五〇巻記念号
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19801100-0649">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19801100-0649</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 東北地方における晩期縄文式土器の器形組成

藤村 東 男

## 1

筆者はさきに東日本の晩期縄文式土器の器形組成に関して、つぎのことを述べたことがある（藤村 一九七七）。

1 従来晩期縄文式土器は、壺形、注口土器など目につきやすい器形によって印象づけられてきたが、量的に見る限り中心的な役割をはたしているのは、深鉢・鉢形である。

2 それは深鉢・鉢形を基本的な器形とする縄文式土器にあつては当然のことであり、縄文時代草創期以来の伝統が晩期に至っても保持されている。

3 しかし、その伝統は壺形、甕形、坏形を主要な構成要素とする弥生式土器には連続しない。

4 以上の特徴は、東日本全体に共通しており、『亀岡式土器』と称される東北地方のみを特別視することはできない。

これらのことは、その後公表された諸資料によつても裏づけられ、晩期縄文式土器の一般的な特徴として認めるに至つた。ところで、深鉢・鉢形が多数を占めるという事実は、口縁部破片をも含んだ総個体数の集計結果によつて導き出されたものであるが、その総個体数の中には使用中の破損消耗などを補うために、後に追加補充された土器をも含んでおり、必ずしも使用時の器形組成を正確に反映したものではない。

土器は器形によって使用方法も違い、また破損の頻度、補充の量も異ってくる。さらに土器が廃棄され、堆積中の破損も考慮せねばならないが、これも器形によって一様ではない。したがって、さきの口縁部破片をも含んだ集計結果は、そこで用いられた土器の累積総量として理解すべきものであり、使用時の器形組成はそこから新規補充された数を引き、また堆積中の破損数を加えて求めたものでなければならぬ。

そこで筆者は本稿において、これまで公表された数値をもとにして、使用時における器形組成がどの程度推定しうるのかについて考えてみたい。

## 2

これまで知り得た東北地方の晩期縄文式土器の組成比率にはつぎのものがある。なおこれ以外に、二、三の遺跡の数値が得られたが、使用した資料、集計方法に疑問が残るため、本稿では除外した。

青森県下北郡大間町ドウマンチャ貝塚

同 八戸市是川遺跡

同 東津軽郡三厩村宇鉄遺跡

同 西津軽郡木造町亀ガ岡遺跡

同 北津軽郡板柳町土井I号遺跡

同 南津軽郡平賀町石郷遺跡

岩手県北上市九年橋遺跡

宮城県栗原郡一迫町山王遺跡

同 栗原郡若柳町館貝塚

同 宮城郡七ヶ浜町沢上貝塚

同 宮城郡七ヶ浜町二月田貝塚

福島県いわき市寺脇貝塚

以上十二遺跡の数値は、集計方法の違いから大きく二分することができる。第一のものは、口縁部破片をも含めて集計したもので、前述したように使用された土器の累積総量として理解されるものである。それは、つぎのものである。

ドウマンチャ貝塚（九学会 一九六七 第1表）<sup>①</sup> ①第II群資料（大洞B式） ②第V群資料（大洞A式）

宇鉄遺跡（藤村 一九七八 第1表） （大洞C<sub>1</sub>とC<sub>2</sub>式）

亀ガ岡遺跡（三田史学会 一九五九 第6と10表） ①（大洞C<sub>1</sub>とC<sub>2</sub>式）

山王遺跡（須藤 一九七三 七八頁）<sup>②</sup> ①（大洞C<sub>2</sub>式） ②（大洞A'式）

館貝塚（林 一九七六 第1表） ①第I期（大洞BとBC式） ②第II期a（大洞C<sub>1</sub>式） ③第II期b（大洞C<sub>2</sub>式）

④第III期（大洞A'式と福浦島下層式）

沢上貝塚（後藤・他 一九七一 第4表） （大洞B式）

二月田貝塚（塩釜女子高 一九七一 第15表） （大洞B式）

寺脇貝塚（いわき市教委 一九六八 第8表） （大洞C<sub>2</sub>式）

以上八遺跡十三例の数値を示した第1表<sup>③</sup>によると、すべて深鉢・鉢形<sup>④</sup>が60%以上を占め、浅鉢形、壺形が10%前後でこれに続き、注口土器は大半が1%未満となっている。本稿冒頭に述べた——量的に見る限り中心的な役割をはたしているのは、深鉢・鉢形である——ことは、かような結果に基づいたものである。

しかし、つぎにあげる第二の組成比率はかなり異った数値を示す。これは完形資料を中心として集計したものであり、使用中および堆積中の破損を受けることなく、最後まで使用可能な状態で残った資料である。

第 1 表 第一の集計方法による出土個体数と比率 (%)

遺 跡 名	深 鉢 形				浅 鉢 形			壺 形	注 口 土 器	そ の 他	合 計
	深鉢形	合付深鉢形	鉢 形	合付鉢形	浅鉢形	合付浅鉢形	小 計				
ドウマンチャ ①	397(70.8)		111(19.8)				10( 1.8)	40( 7.1)	3(0.5)		561
” ②	51(81.0)		9(14.3)				2( 3.2)	1( 1.6)			63
宇 鉄	545(68.7)		138(17.4)		44(5.5)	1(0.1)	45( 5.7)	61( 7.7)	3(0.4)	1(0.1)	793
亀ガ岡 ①	93(32.3)		118(41.0)	5( 1.7)			31(10.8)	40(13.9)	1(0.3)		288
山 王 ①	154(71.3)		103(27.0)		28(13.0)		28(13.0)	32(14.8)	2(0.9)		216
” ②	184(48.0)				46(12.0)		46(12.0)	50(13.0)			382
館 ①	305(62.8)		45( 9.3)		26(5.3)	37( 7.6)	63(13.0)	30( 6.2)	39(8.0)	4(0.8)	486
” ②	68(52.3)		13(10.0)		10(7.7)	12( 9.2)	22(16.9)	22(16.9)	5(3.8)		130
” ③	127(52.3)		29(11.9)		42(17.3)	10( 4.1)	52(21.4)	29(11.9)	5(2.1)	1(0.4)	243
” ④	95(53.4)		18(10.1)		5(2.8)	22(12.4)	27(15.2)	37(20.8)		1(0.6)	178
沢 上								7( 9.2)	3( 3.9)		76
二月田								8(1.7)	8( 1.7)	13( 2.8)	466
寺 脇	266(62.1)		90(24.7)	2( 0.5)			16( 3.4)	13( 2.8)	4(0.9)		364
							27( 7.4)	18( 4.9)	1(0.3)		

是川遺跡(杉山 一九二八 第一〇九〜一一四図、清水 一九六六 一二二頁) ①杉山集計資料(後期末〜大洞A式)

②清水集計資料(同上)

亀ガ岡遺跡(前掲) ②(大洞C<sub>1</sub>とC<sub>2</sub>式)

土井工号遺跡(村越・工藤 一九七二 八頁)(大洞BCとA式)

石郷遺跡（平賀町教委 一九七五 八頁）（大洞B式）

九年橋遺跡（北上市教委 一九八〇 第44表） ①（大洞C<sup>2</sup> A<sup>5</sup>式） ②（同上） ③（同上）

第2表 第二の集計方法による出土個体数と比率（%）

遺跡名	深鉢形			浅鉢形			壺形	注口土器	その他	合計		
	深鉢形	付合深鉢形	鉢形	浅鉢形	付合浅鉢形	小計						
是川①	72(7.2)		131(13.1)	94(9.4)	297(29.8)	92(9.2)	43(4.3)	135(13.5)	341(34.2)	190(19.1)	34(3.4)	997
” ②	45(2.7)	84(5.0)	177(10.5)	143(8.4)	449(26.5)	321(19.0)	25(1.5)	346(20.4)	575(34.0)	295(17.4)	28(1.7)	1693
亀が岡②		1(2.1)	18(37.5)	3(6.3)	22(45.8)			9(18.8)	17(35.4)			48
土井1号	31(8.5)	34(9.3)		12(3.3)	77(21.6)	45(12.3)	1(0.3)	46(12.6)	199(54.4)	28(7.7)	16(4.4)	366
石郷		3(3.0)	12(12.1)	11(11.1)	26(26.3)	7(7.0)	4(4.0)	11(11.1)	37(37.4)	22(22.2)	3(3.0)	99
九年橋①	13(4.4)		110(37.2)	24(8.1)	147(49.7)	35(11.8)	9(3.0)	44(14.9)	96(32.4)	9(3.0)		296
” ②	37(6.5)	1(0.2)	204(35.7)	38(6.7)	280(49.0)	96(16.3)	29(5.1)	125(21.9)	152(26.6)	17(3.0)		571
” ③	144(15.0)	2(0.2)	265(27.6)	47(4.9)	450(47.8)	120(12.5)	47(4.9)	167(17.4)	301(31.4)	26(2.7)	7(0.7)	959

以上五遺跡八例の数値<sup>6)</sup>（第2表）によると、第一で60%を超えていた深鉢・鉢形は50%以下となり、反対に壺形が20%、浅鉢形が10%以上を占めるようになる。さらに是川、石郷両遺跡では、注口土器が二割前後と高い比率を示し、さきの口縁部破片をも含めた集計とは明瞭な差を持つてくる。

3

この二つの集計方法の違いによって生じた差は、使用中および堆積中の破損が強く原因している。その点を、さらにみ

てみると、まず深鉢・鉢形は第一の方法では最大95%、最小62%、平均78%とおおよそ八割ほどの高率となる。これに対し第二の方法では、最大50%、最小22%、平均37%と、約四割を占め、その間に40%ほどの差が生じる。

つぎに浅鉢形は、第一では最大21%、最小2%、平均10%であるのに対し、第二では最大22%、最小11%、平均16%と、やや第二のほうが高率ではあるが、その差は小さい。

壺形は、第一では最大21%、最小2%、平均10%と浅鉢形と似た数値をとるが、第二では最大54%、最小27%、平均36%と、逆に26%ほど第二のほうが高率となる。

最後に注口土器は、第一では最大8%、最小は0%、平均2%と低率であるのに対し、第二では最大22%、最小3%、平均10%（晩期初頭の資料では20%ほど、中葉以降では4%ほどとなろう——註7参照）と、壺形と同じく第二の方法のほうが高率となる。

その結果、深鉢・鉢形の場合は第一の方法が、壺形、注口土器は第二の方法がそれぞれ高い比率を示し、浅鉢形の場合はさほど顕著な差が生じてこないことがわかる。これは深鉢・鉢形ほど口縁部破片が多く、使用中あるいは堆積中の破損の頻度が高かったことを示している。そこでまず堆積中の破損について考えてみると、口縁が広がり、器高の高い深鉢形は、球形の胴部を持つ壺形、注口土器よりも、土圧を受け破損しやすいことは当然であるが、これは調査中の資料採集および調査後の復原作業を念入りに行うことによって、ある程度は堆積前の状態に復することができるものである。

筆者らが担当した九年橋遺跡の調査では、ことさらそれらの作業を慎重に行った結果、ほぼ調査区域内に廃棄された時の器形組成を復原することができた。それは九年橋遺跡③で示した数値であり、深鉢・鉢形48%、浅鉢形17%、壺形31%、注口土器3%といったものである。これとさきの第二の方法での平均とを比べてみると、深鉢・鉢形は依然として10%ほどの差を持つが、他の器形は1~5%ほどの差にすぎず、完形資料で得られた数値は深鉢・鉢形に多少の誤差を伴いながらも、かなり正確に廃棄時の器形組成を反映したものであることが認められた。

つぎに累積個体数（口縁部破片を含めた個体数）と、廃棄時の個体数（一応完形資料による個体数）との関係についてみてみよう。この両者の数値を明かにしたものは亀ガ岡遺跡の例（①と②）しかないので、それを用いることとする。亀ガ岡遺跡では、完形資料四八点に対し、口縁部破片を含めた個体数は六倍の二八八点であった。この数値を用いると、深鉢・鉢形は $(78 \times 6 - 37) \div 37 = 11.6$ となり、完形資料の一・六倍の口縁部破片があることになる（亀ガ岡遺跡のみでは八・八倍）。以下同じく浅鉢形二・八倍（同一・四倍）、壺形〇・七倍（同一・四倍）、注口土器〇・二倍（亀ガ岡遺跡では完形資料が出土していない）となり、圧倒的に深鉢・鉢形の破片が多いこととなる。

これは廃棄された完形資料の十数倍の深鉢・鉢形が用いられ、破損し、補充されていたことを示しており、この器形の利用頻度と消耗率がいかに高かったことが理解されよう。したがって当時実際に使用されていた土器の器形組成を考えるにあたっては、土器の消耗率を念頭に置き、深鉢・鉢形の場合をもっと下げて考えなければならない。逆に壺形、注口土器は高く見積らなければならない。たとえば九年橋遺跡の数値を利用すると、それは深鉢・鉢形50%、浅鉢形15%、壺形30%、注口土器5%と、これまで晩期縄文式土器の組成比率と考えていたものとは、深鉢・鉢形と壺形とが大きく異なるものとなる。しかしこの点は、未だ資料的な裏づけが弱いので、予測程度にとどめておき、将来の検討に委ねたい。

以上これまで用いられることのなかった完形資料による数値は、むしろ使用時の器形組成を考えるうえからは重要なものとなることを述べてきた。また器形によって破損消耗の度合に違いがあることも述べた。最後に土器の消耗と文様変遷の関連について触れて本稿のまとめとしたい。

それは、東北地方の晩期縄文式土器の文様変遷を見てみると、消耗度の高い深鉢・鉢形ほど文様変遷の速度は遅く、逆に消耗度の低い壺形、注口土器ほどその速度が速く、消耗度と文様変遷の速度とが反比例の関係にあることである。これは一見すると矛盾しているように思われるが、補充のために製作された土器が必ずしも文様を変える際の契機となっていないことを物語ってしよう。

また消耗度の低い土器が小刻みに文様を変化させている背後には、それらの土器が短期間のうちに交替されていることが必要であり、未だ使用可能な状態である完形の資料が多数出土することも、破損が原因での廃棄ではなく、文様の交替に符合させた廃棄であったと考えることもできよう。

註

(1) 第II群の数値は、第1表と第2表とは異っているので、

第1表をもとにした。

(2) 各器形の個体数が示されていないので、総個体数と各器形の比率から逆算した。

(3) 第3表を作成するにあたっては報告者の器形区分をつぎのように統合した。

ドウマンチャ貝塚 深鉢形(深鉢)、鉢形(鉢)、浅鉢形(浅鉢)、壺形(広口壺、細口壺)、注口土器(注口)

宇鉄遺跡 深鉢形・台付深鉢形・鉢形(深鉢・鉢)、台付鉢形(台付鉢)、浅鉢形(浅鉢)、台付浅鉢形(台付浅鉢)、壺形(壺)、注口土器(注口)

亀ガ岡遺跡 深鉢形(深鉢形)、鉢形(鉢形)、台付鉢形(台付)、浅鉢形(皿形)、壺形(壺形)、注口土器(注口)  
山王遺跡 深鉢形(深鉢)、鉢形(丸底鉢)、浅鉢形(浅鉢)、

台付浅鉢形(高坏)、壺形(壺)、注口土器(注口)

館貝塚 深鉢形(粗製甕、粗製深鉢、精製深鉢)、鉢形(粗

製鉢、精製鉢)、浅鉢形(精製皿)、台付浅鉢形(精製高坏)、

壺形(粗製壺、精製壺)、注口土器(精製注口)

沢上貝塚 深鉢・鉢形(深鉢形土器)、浅鉢形(浅鉢形土器)、

壺形(壺形土器)、注口(注口土器)

二月田貝塚 深鉢・鉢形(深鉢形土器)、浅鉢形(浅鉢形土

器)、台付浅鉢形(皿形台付土器)、壺形(壺形土器)、注口土

器(注口土器)

寺脇貝塚 深鉢形(深鉢)、鉢形(鉢)、台付鉢形(台付鉢)、

浅鉢形(浅鉢、皿)、壺形(長胴壺、広口壺、短頸壺)、注口土

器(注口)

(4) つぎの理由から、深鉢形、台付深鉢形、鉢形、台付鉢形を深鉢・鉢形に、また浅鉢形、台付浅鉢形を浅鉢形に一括して取り扱う。(7) 深鉢と鉢の区分は口径と器高との比から求めるもの

であるが、破片資料ではその区分が容易ではなく、厳密性に欠ける。①底部が平底となるか、台付が付くかは、口縁破片では判定がつかかね同じく正確さに欠ける。

(5) 九年橋遺跡の集計は、つぎの三方法によった。①完形資料のみで集計、②一部を欠く資料を加える、③口縁あるいは底部を欠く資料を加える。

(6) 第4表を作成するにあたっては、つぎのように統合した。

是川遺跡① 深鉢形(深鉢形)、鉢形(鉢形)、台付鉢形(深鉢台附)、浅鉢形(浅鉢形、皿形)、台付浅鉢形(浅鉢台附)、壺形(A・B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>・B<sub>3</sub>各壺形、C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>・C<sub>3</sub>各平壺、德利形)、注口土器(壺形注口、急須形注口、菱形注口)

是川遺跡② 深鉢形(甕形)、台付深鉢形(台付甕形)、鉢形(鉢形)、台付鉢形(台付鉢形)、浅鉢形(浅鉢形、皿形)、台付浅鉢形(台付皿形)、壺形(壺形)、注口土器(注口)

亀ガ岡遺跡 (前掲)

土井I号遺跡 深鉢形(深鉢、甕形)、台付深鉢形(台付深鉢)、鉢形(碗形)、浅鉢形(浅鉢、皿形、丹塗り皿)、台付浅鉢形(丹塗り台付浅鉢)、壺形(粗製壺、精製壺、丹塗り壺)、注口土器(注口)

石郷遺跡 深鉢形(深鉢)、鉢形(鉢)、台付鉢形(台付鉢)、浅鉢形(浅鉢、皿)、台付浅鉢形(高坏)、壺形(壺)、注口土器(注口)

九年橋遺跡 (本稿の区分と同じ)

(7) 両遺跡で注口土器が多数出土していることは、晩期初頭を

東北地方における晩期縄文式土器の器形組成

中心とした資料であるためであろう。かつて筆者が是川遺跡出土の注口土器二九二点を集計したところ、後期中葉に属するもの二九点、同じく後期末六一点、大洞B式九一点、BC式五八点、C<sub>1</sub>四一点、C<sub>2</sub>式十二点と、晩期初頭の資料が半数を占めていた。

#### 〈文献〉

藤村東男 一九七七 晩期縄文式土器の器形組成(萌木 12号)

同 一九七八 青森県宇鉄遺跡出土土器の補修孔について

(萌木 13号)

後藤勝彦・丹治英一・榎要照 一九七一 宮城県七ヶ浜町沢上貝

塚の調査(仙台湾 創刊号)

林 謙作 一九七六 亀ヶ岡文化論(『東北考古学の諸問題』)

平賀町教育委員会(村越潔・葛西励) 一九七五 青森県平賀町

石郷遺跡発掘調査概報

いわき市教育委員会(江坂輝彌・渡辺誠) 一九六八 寺脇貝塚

発掘調査報告(『小名浜—小名浜湾沿岸の遺跡調査報告

集—』)

北上市教育委員会(藤村東男) 一九八〇 九年橋遺跡第六次調

査報告書(北上市文化財調査報告 第29集)

九学会連合下北委員会(江坂輝彌・渡辺誠・高山純) 一九六七

大間町ドウマンチャ貝塚(『下北—自然・文化・社会—』)

三田史学会(清水潤三) 一九五九 亀ヶ岡遺跡—青森県亀ヶ岡

低湿地遺蹟の研究—(考古学民族学叢刊 第三冊)

村越潔・工藤泰博 一九七二 青森県板柳町土井工号遺跡（月刊  
考古学ジャーナル 75号）

清水潤三 一九六六 是川遺跡（中央公論美術出版 美術文化シ  
リーズ）

塩釜女子高校社会部 一九七一 宮城県七ヶ浜町二月田貝塚（Ⅱ）  
（貝輪 7号）

須藤 隆 一九七三 土器組成論―東北地方における初期稲作農  
耕社会成立過程究明のための基礎的研究―（考古学研究  
第19巻第4号）

杉山寿栄男 一九二八 陸奥是川出土土器千個に対する土器分類  
（『日本原始工芸概説』）